

ダンテ『神曲』と新発田・上館
—山川丙三郎について—

敬和学園大学
山田耕太

ダンテ学者：山川丙三郎



山川丙三郎の生涯

- 1876(M9)年 山川経邦・えきの三男として蒲原郡加治村上館に生まれる
加治小学校、北越商会付属(→新潟区立)商業学校を卒業
- 1889(M22)年 北越学館入学 五十公野の出村悌三郎(後東北学院院長)と出会う
- 1892(M25)年 キリスト教受洗、東北学院予科入学 その後 本科生卒業
- 1897(M30)年 東北学院文科専修部(英文)卒業、同学院図書館図書係
- 1899(M32)年 上京、憲兵司令部付陸軍通訳
- 1904(M37)年 カリフォルニア大学バークレー校特別科入学
- 1908(M41)年 アメリカ高等教育資格試験合格、太平洋神学校入学(1年半で退学)
- 1911(M44)年 帰国、新井奥邃・謙和舎の門下生(田中正造)『神曲』の翻訳に没頭
- 1914(T3)年 我が国最初に『神曲・地獄篇』(警醒社)を出版
- 1915(T4)年 北蒲原郡本田村本田の医師渡辺護・善の長女なおと結婚
- 1917(T6)年 『神曲・浄火篇』(警醒社)出版
- 1919(T8)年 出村悌三郎の斡旋で東北学院英文科教授に就任
- 1922(T11)年 『神曲・天堂篇』(警醒社)出版 1929(S4)『新生』(岩波書店)出版
- 1940(S15)年 東北学院定年退職・名誉教授 1947(S22)年 71歳で永眠

東北学院学生時代の山川丙三郎

(前列右2人目教師の押川方義、前列左端 木村清松、
後列左端より 出村悌三郎、山川丙三郎:北越の三羽鳥)



詩を朗読する山川丙三郎(日本で最初にバラードを教える)



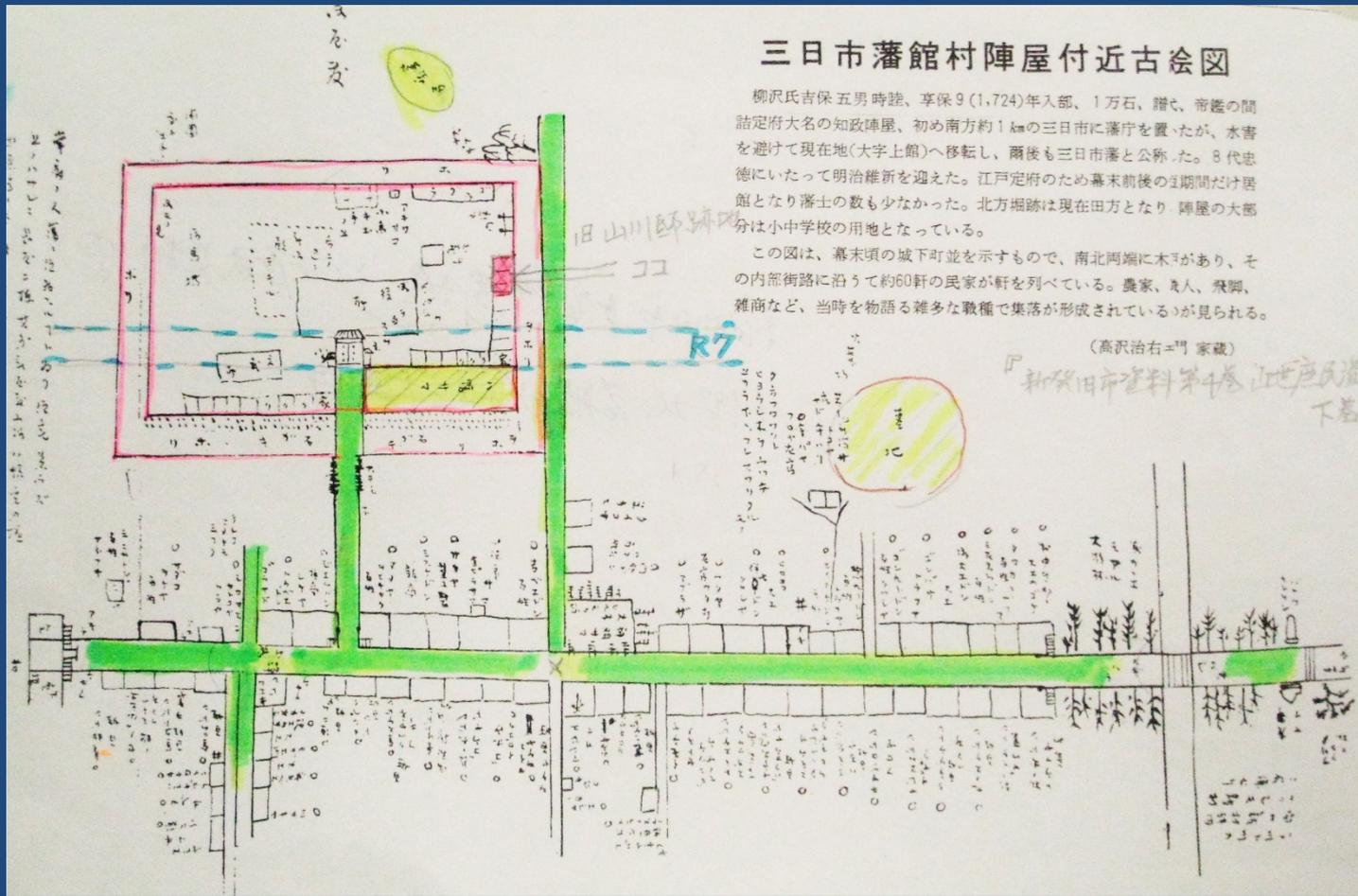
新発田市中心と周辺(1山川邸跡,2出村邸跡,3渡辺邸跡)



山川丙三郎の実家跡・新発田市上館 (赤 柵七葉中/三日市城跡地, 緑 旧道, 黄 寺・神社, 青 R7)



新発田市上館・江戸時代古地図 (赤枠 三日市城堀、緑 旧道、黄 寺・神社、青 R7)



山川丙三郎生家跡地・新発田市上館 (七葉中学校の裏手)



妻なおの実家跡



妻なおの出身地・新発田市本田
(本田小学校の先、川を渡って左手入る)



妻なおの実家（新発田市本田・渡辺医院）



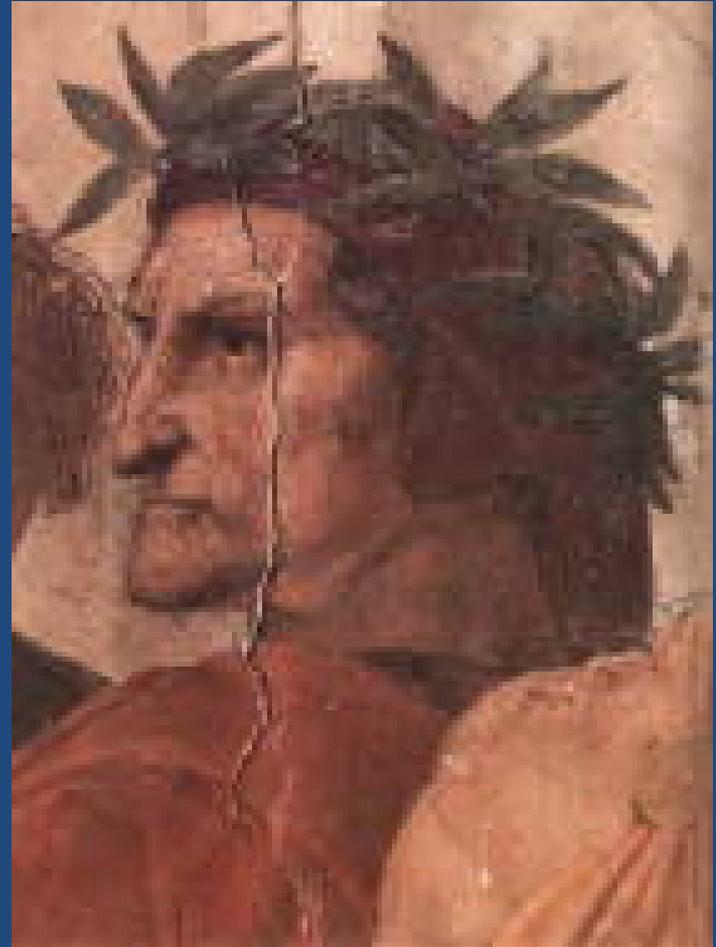
仙台市にある山川丙三郎の墓



現在の山川丙三郎の墓 (仙台市北山クリスチャン墓地)



ボッティチェリ画『ダンテ』 ラファエロ画『ダンテ』



ダンテ・アリギエーリの生涯

1265年 フィレンツェの小貴族の家に生まれる

1270年 母ドンナ・ベルラ世を去る

1274年 「ベアトリーチェ」を初めて見る

1277年 父アリギエーロ世を去る

(修道院付属のラテン語学校で教育を受け、当代一流の学者ラティーニから修辞学を学び、西洋古典のホメロス、ヴェルギリウス、オヴィディウスなどの作品を読む)

1283年 「ベアトリーチェ」に再会する この頃から詩を作成し初めてソネットを作る
(イタリアの代表的詩人カヴァルカンティらを知り、ボローニャ大学で「雄弁論」を聞く)

1290年 「ベアトリーチェ」24歳でこの世を去る (ボエティウス『哲学の慰め』

キケロ『友情論』などを読む、各派の修道院で神学や哲学の講義を聞く)

1292年 「永遠の女性」への想いを綴った詩31編をまとめた『新生』出版(=原神曲)

1295年 婚約者ジェンマ・ドナーティと結婚、医薬業組合に参加し公職に就く

1300年 フィレンツェの「プリオリ」(6人の政治指導者)に就く

1305年 政治的対立と陰謀により、フィレンツェを永久追放され、放浪生活に入る

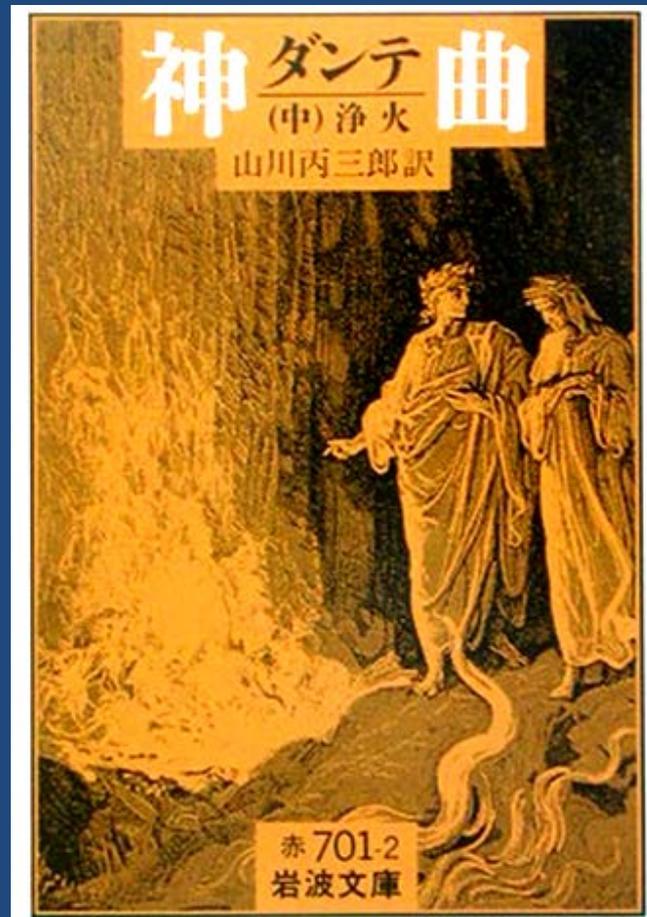
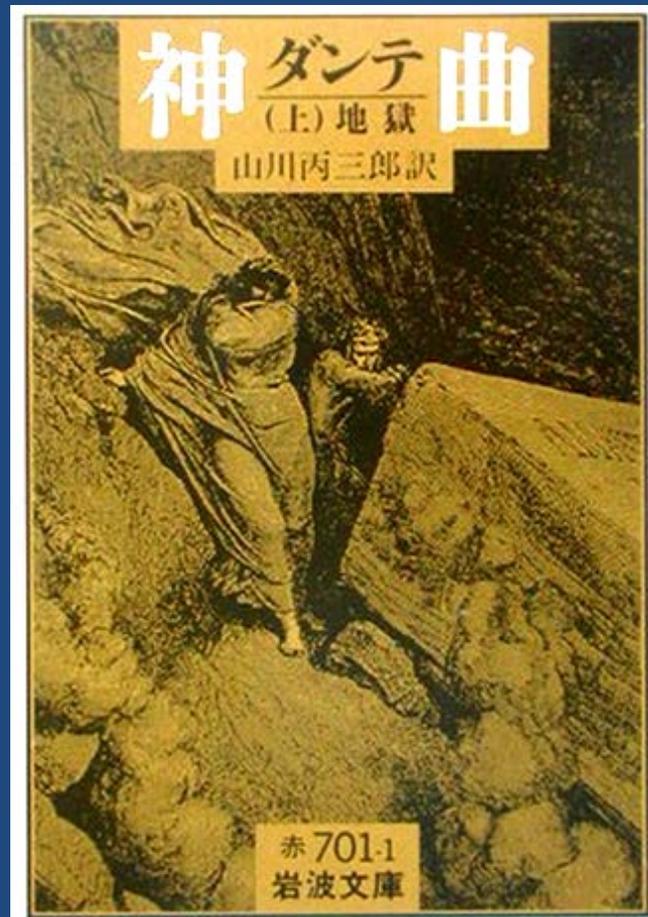
1307年 この頃から『神曲』を書き始める ルッカから、招かれてヴェローナに移る

1317年 ラヴェンナに移住し、安住の地とする

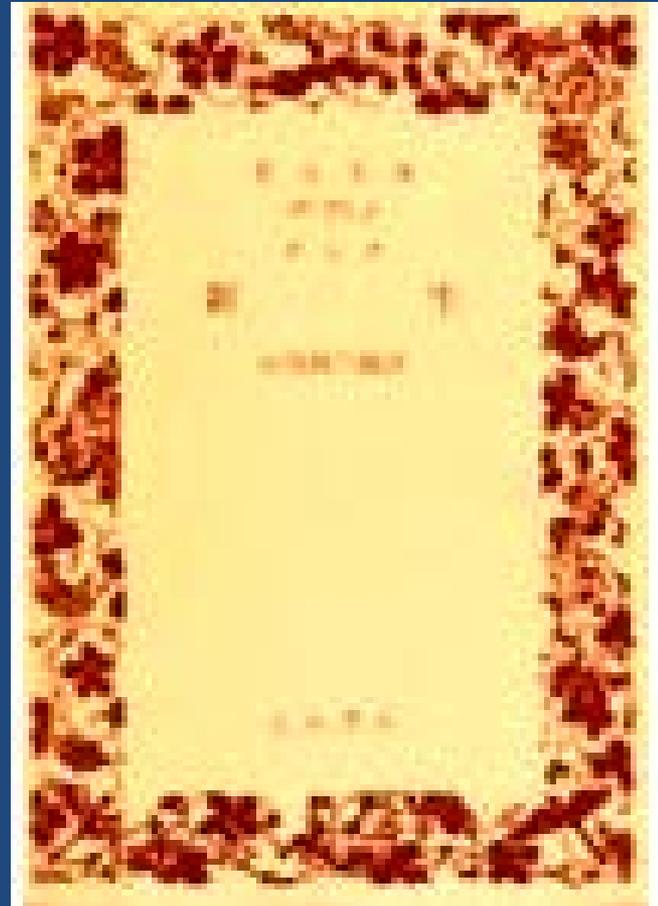
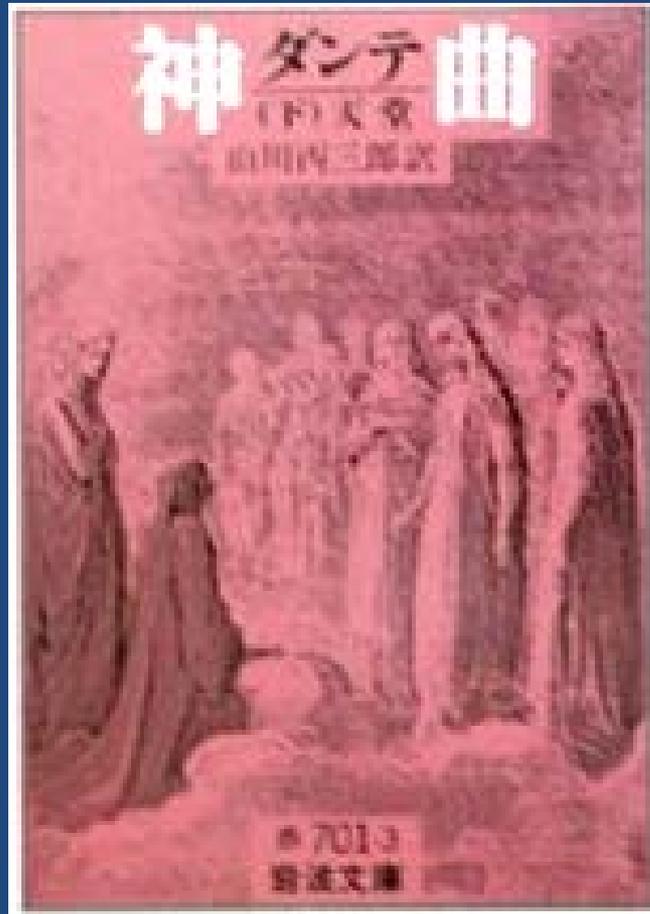
1320年 この頃『神曲』を完成する

1321年 ラヴェンナで没する

山川訳『神曲』地獄篇・浄火篇(岩波文庫)



山川訳『神曲』天堂編・『新生』(岩波文庫)



山川丙三郎訳『神曲』

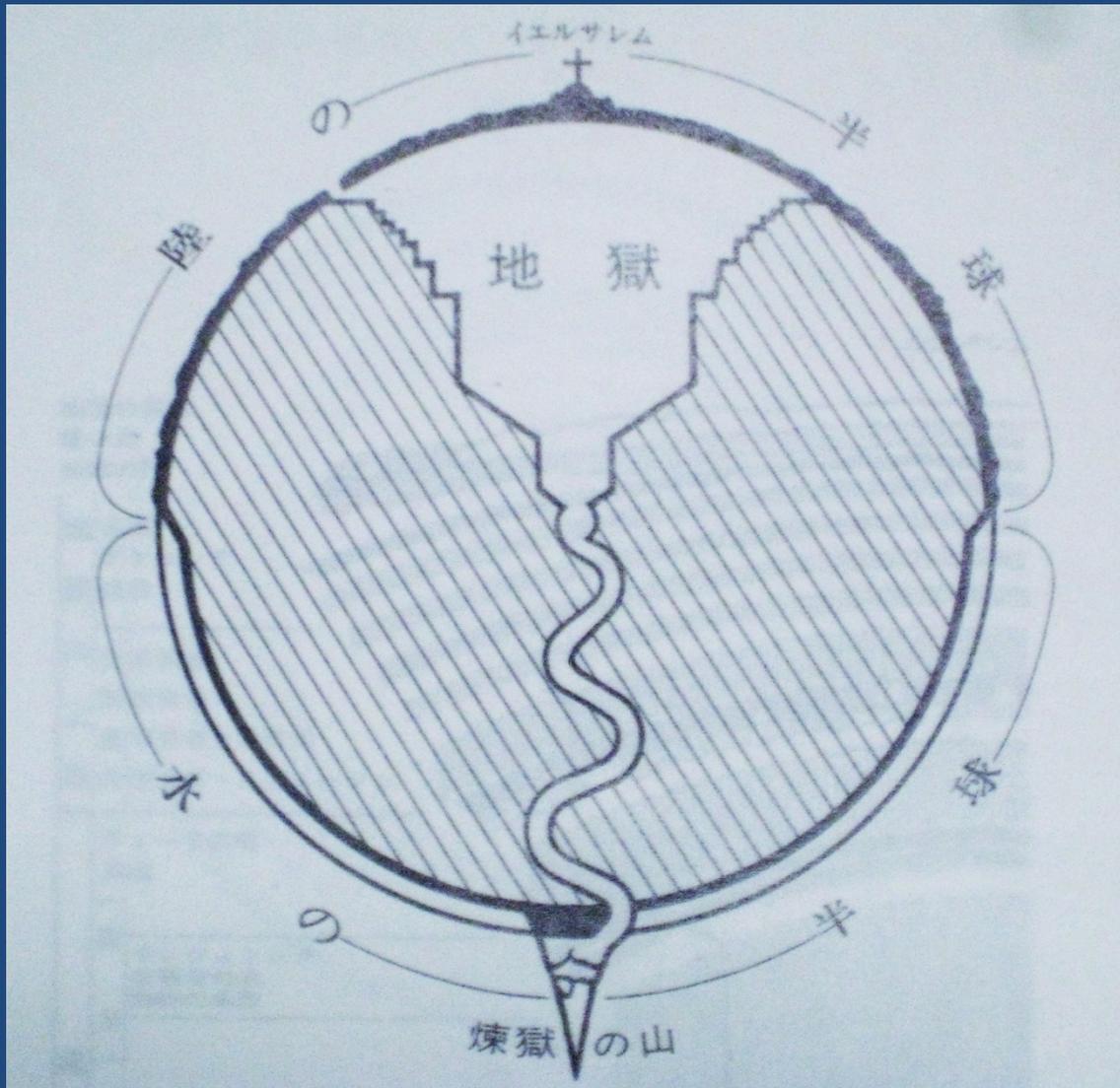
『地獄篇』第1曲

「われ正路を失い、
人生の羈旅半ばにありて
とある林の中にありき」

『地獄篇』第3曲

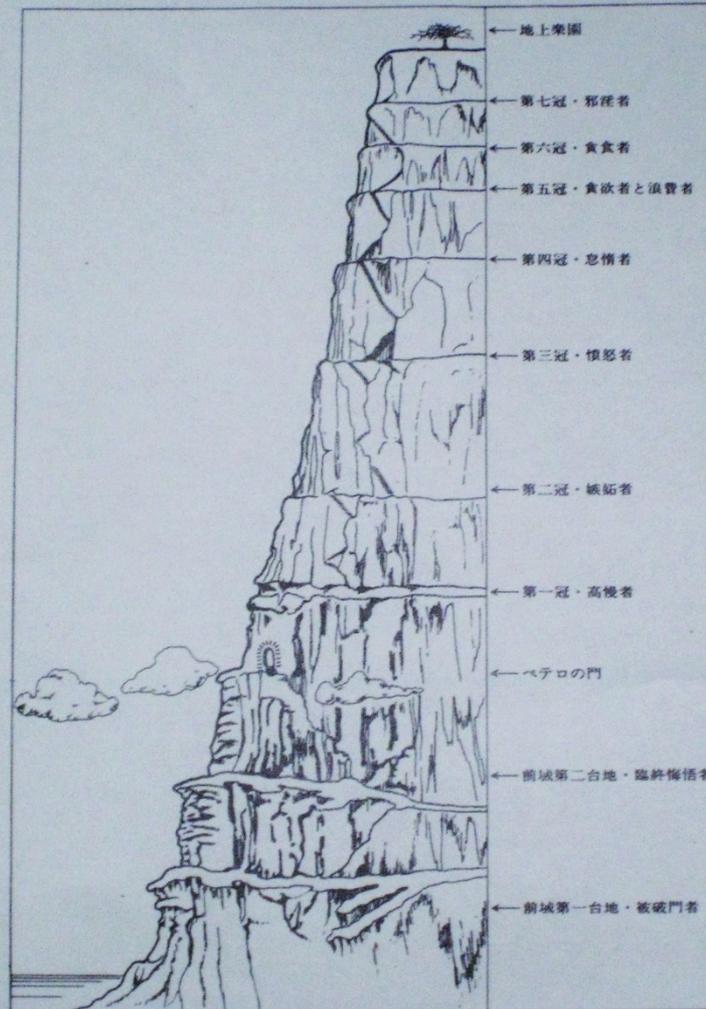
「我を過ぐれば憂ひの都あり
我を過ぐれば永遠の苦患あり
我を過ぐれば滅亡の民あり
汝等ここに入るもの
一切の望みを棄てよ」

ダンテ『神曲』全体図

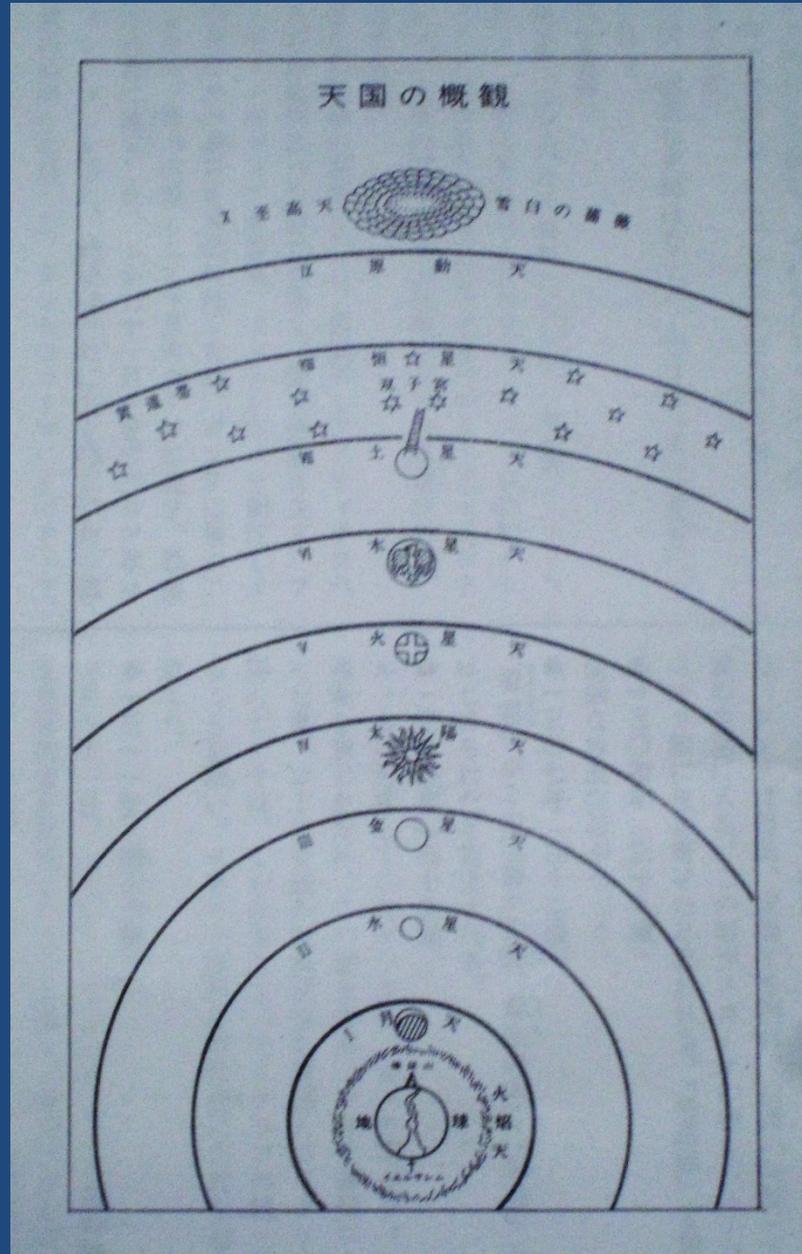


ダンテ『神曲』煉獄編

煉獄山の図



ダンテ『神曲』天国編



『神曲』各篇の最後の行

『地獄篇』第33曲139行

「かくてこの處を出でぬ
再び諸々の星を見んとて」

『煉獄篇』第33曲143行

「清くして、諸々の星にいたるに
ふさはしかりき」

『天国篇』第34曲145行

「日やそのほかのすべての
星を動かす愛に」

参考『新生』第1ソネット

「星みな燦かなる時の間の
三つの一ほゞ過ぎしころ
愛ふと我に現れぬ」

『神曲』の影響1:ミケランジェロ(1475年-1564年)



ミケランジェロ『最後の審判』 (ヴァチカン・システイナ礼拝堂)



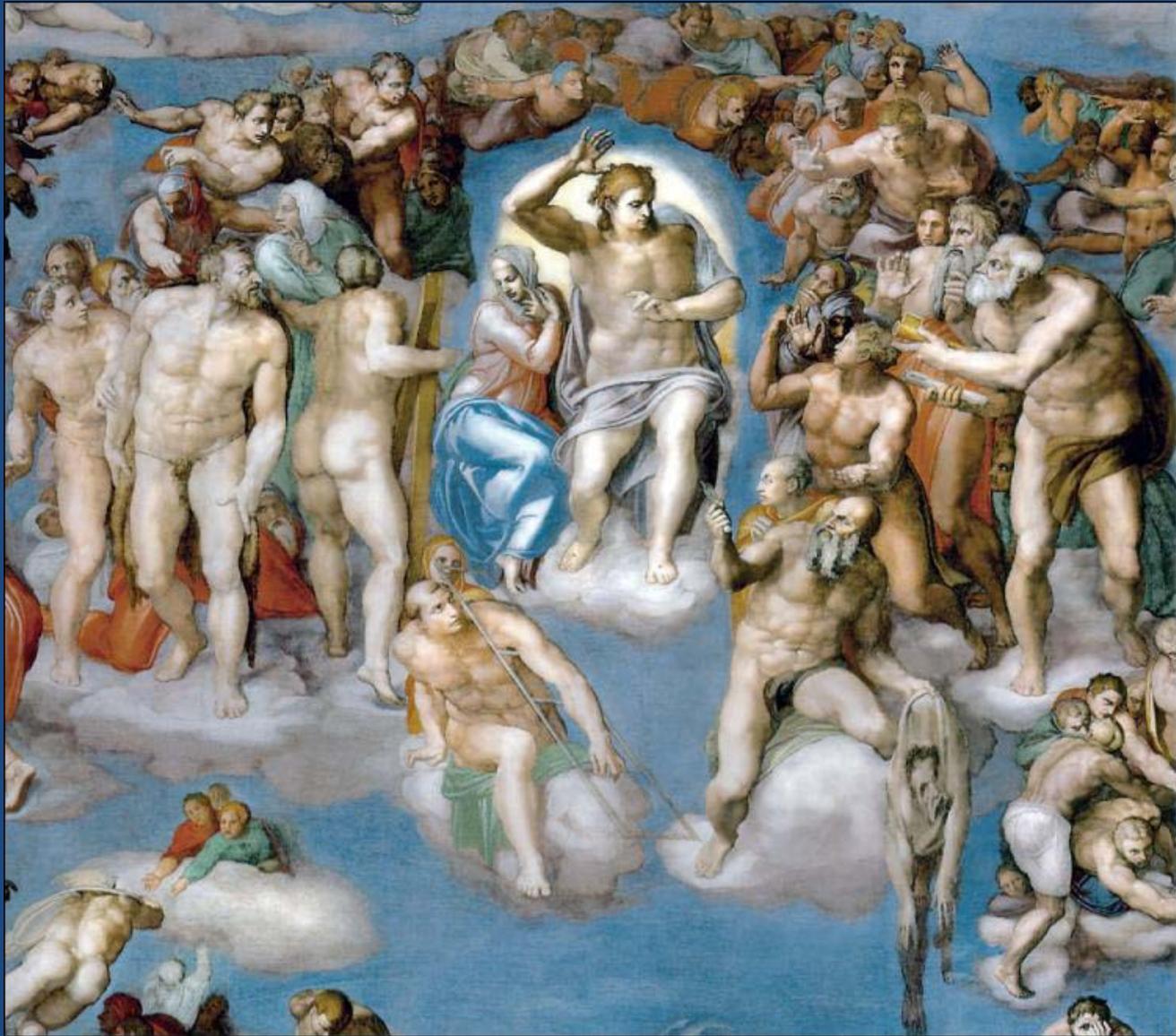
ミケランジェロ「地獄」

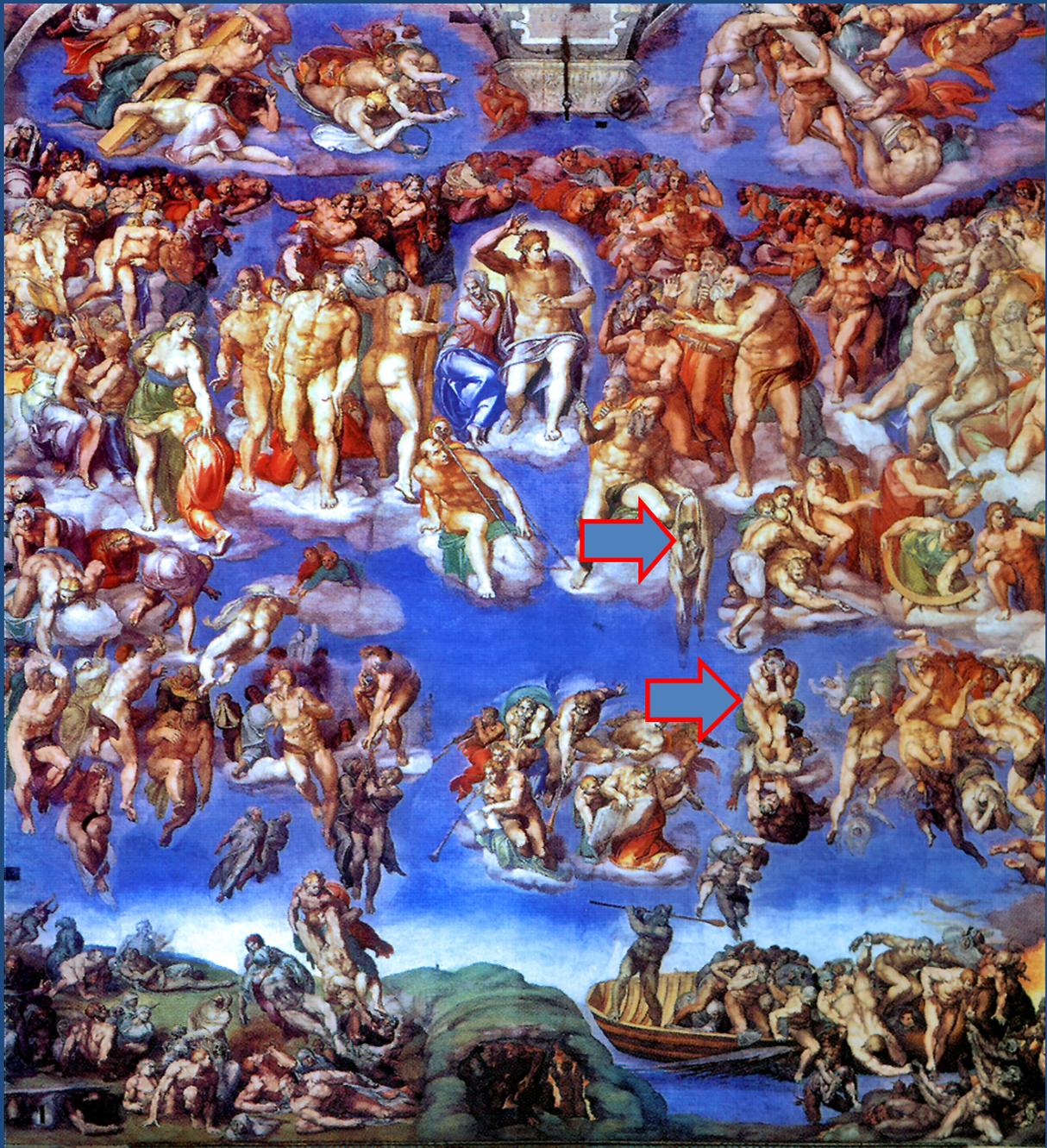


ミケランジェロ「煉獄」

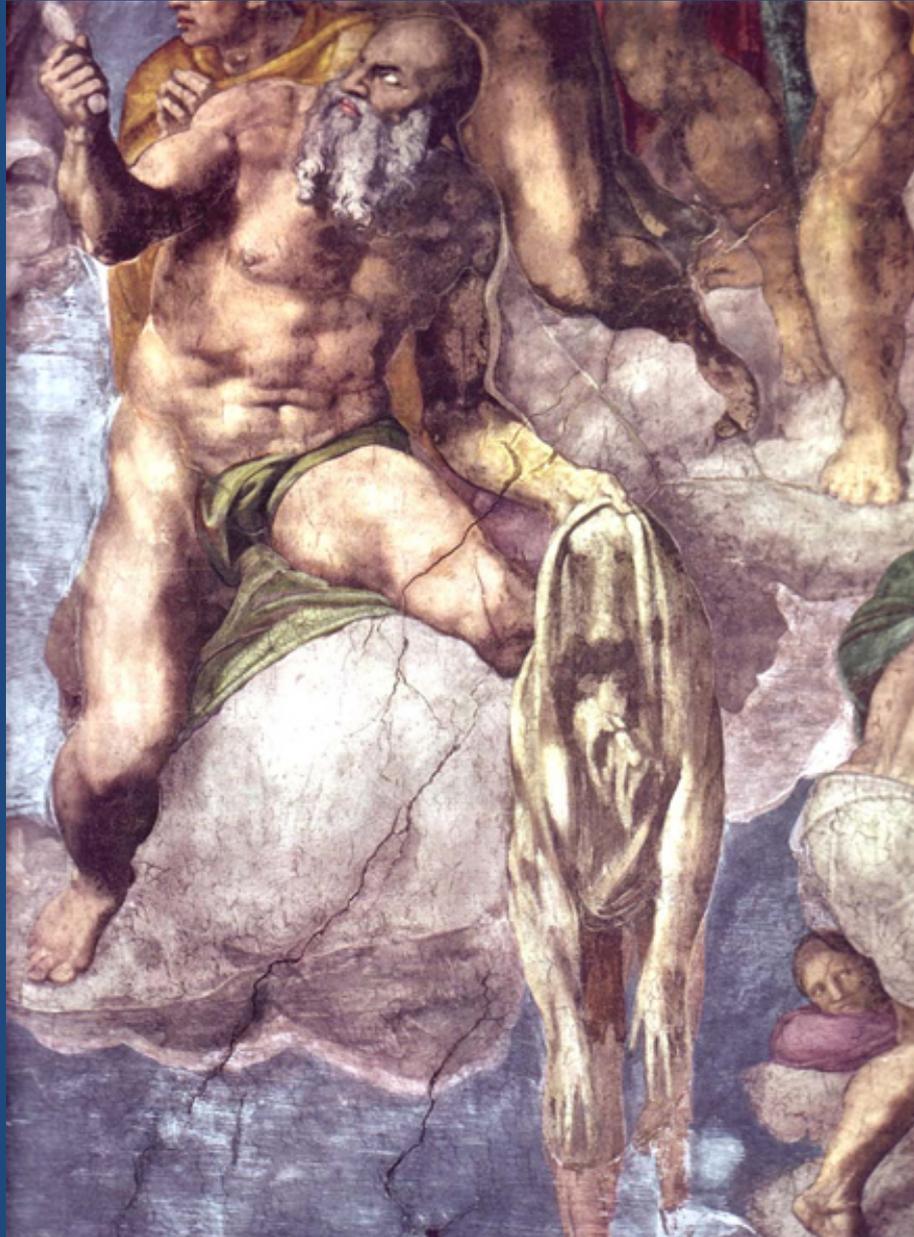


ミケランジェロ「天国」

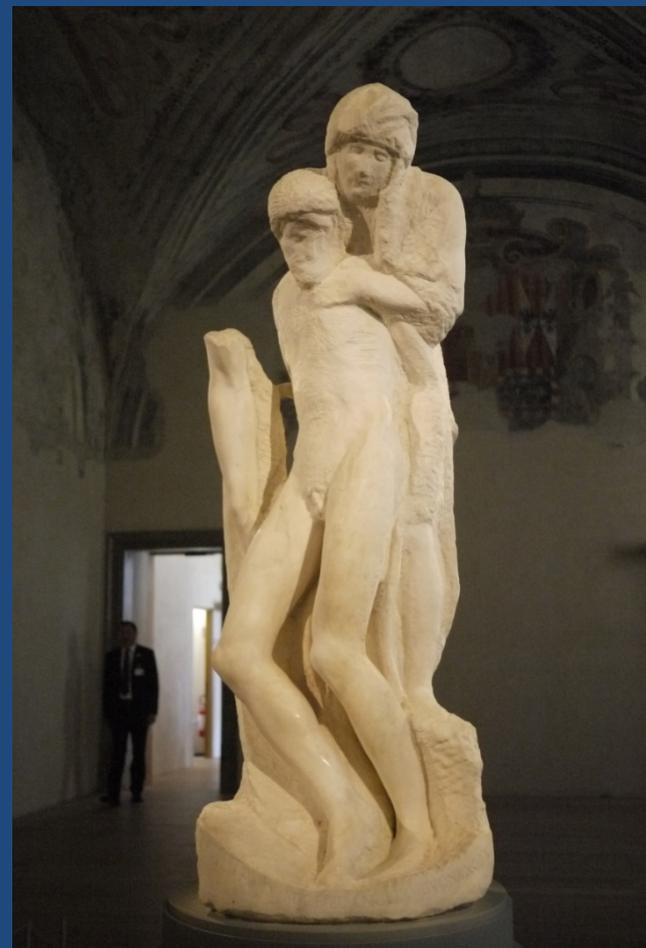




地獄に落ちそうなミケランジェロの「自画像」40代



フィレンツェの『ピエタ』とロンダニーニの『ピエタ』 ミケランジェロの「自画像」(70代と80代)



地獄を見つめるミケランジェロの「考える人」



『神曲』の影響2:ロダン(1840-1917)



ロダン「地獄門」(地獄篇第3曲) (上野・西洋美術館)



『地獄門』上部の「考える人」



地獄を見つめるロダンの「考える人」(拡大像)
(上野・西洋美術館)



「愛の讃歌」の始めと結び (I コリント12:31b, 13:13-14:1a)

「そこで、私はあなたがたに最高の道を教えます。」



「それゆえ信仰と、希望と、愛、この三つは、
いつまでも残る。その中で最も大切なものは、
愛である。愛を追い求めなさい。」